



Title	階層性から一律化へ、そして標準化へ：五箇山親族呼称の60年
Author(s)	真田, 信治
Citation	阪大日本語研究. 1997, 9, p. 51-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10495
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

階層性から一律化へ、そして標準化へ

—五箇山親族呼称の60年—

From Stratification to Unification and Standardization

—60 Years of Address Terms in Gokayama—

真田信治

SANADA Shinji

キーワード：五箇山方言、親族語彙、社会意識と言語交替

1はじめに

本稿では、富山県五箇山方言における親族呼称の歴史的推移を、時点を、60年前、30年前、そして現在に定めて、具体的に記述する。そして、その言語交替 (language shift) が、「階層性」から「一律化」「標準化」といった当該地域社会の人々の時代的な社会意識の変化のプロセスと深く関わっていることを明らかにする。

2五箇山方言の親族語彙

五箇山郷の伝統的方言での親族語彙のシステムについては、真田（1978）において詳しく記述した。そこでは、この方言における親族語彙が、個人を中心としてではなく、個人の所属する‘家’を中心として系統化されていることを指摘した。すなわち、親族語の多くのものが「私の‘家’の～」「彼の‘家’の～」という文脈での「～」に代入できるということである。親族語は、単に個人と個人との親族的な関係の表示だけではなく、個々人の属する‘家’の中での、その個人の位置 (status) を考慮に入れた上での関係を表示するのである。

表1は、五箇山郷のある一集落での各家の戸主と主婦が、戦前において、地域社会内部でどのように言及されていたかを調べた結果である（渡辺・真田・杉戸 1986）。なお、表での‘等差’とは、それぞれの家の伝統的権威によってささえられる社会的地位（social status）のことである。当地における用語である。1が最高で、6までの6ランクになっている。

表1 社会階層と親族名称の対応

等差	家	戸主	主婦
1	A	ダンナサン	オクサン
	B	オトト	オカカ
	C	オヤジ	カーカ
	D	トツツア	カーカ
2	E	トツツア	カーカ
	F	トツツア	カーカ
	G	トツツア	カーカ
3	H	トツツア	カーカ
	I	オトーサン	カーカ
4	J	トート	ババ
	K	トート	カーカ
	L	トト	カーカ
5	M	トツツア	カーカ
	N	トト	カーカ
	O	トト	カーカ
	P	トト	ンバ
6	Q	トツツア	カーカ

A家の戸主と主婦が「ダンナサン」と「オクサン」なのは、彼らが、村に一人しかいなかった医者であり、その妻であったからである。どちらの形式も最も敬意度の高いものである。MとQは、Fと同じく、Bにつながる分家である。どちらも当主が亡くなつて母子世帯になつたため、かつての等差が下がつたのである。「トツツア」「カーカ」はFと同じである。このMとQを除けば、他の家の戸主の名称は等差のランクとほぼ対応している。

等差が地域社会内部における各家の社会的階層を代表し、その階層性に対応する親族名称が使い分けられているのである。

一方、主婦はA家の「オクサン」、B家の「オカカ」を除いては、「カーカ」が多く、等差、すなわち社会的階層との間に使い分けの対応関係があまりないようである。「オカカ」は「オトト」と対応するもので、敬意度が高い。

ところで、この記述は、当該地域言語の使用者としての特定個人の内省報告によって成されたものである。この記述を検証するために、このたび（1995年7月～96年12月）、多くのインフォーマントに接触し、それぞれの親族呼称と親族名称を調査したわけである。

3 1935年時点における実態

表2は、当地域に存在する上平村立西赤尾尋常高等小学校に1935（昭和10）年度に在籍していた生徒（31名）を追跡して、彼らが、当時において、自分の「父」「母」「祖父」「祖母」をどのように呼び、言及していたかを調べた結果である。

表では敬意度の高い形式の順に並べてある。

まず、「父」に関しては、オトト／トツツア／トート／トー／トトの5段階がある。「母」に関しては、オカカ／オッカ／（ジャー）／カーカ／カー／ンバの6段階がある。ただし、ジャーとカーカの段階付けについてはよくわからない。ジャーはトツツアに対応しているが、しかしトツツア

図2. 1935年の親族呼称（13、14歳時）

	性	父	母	祖父	祖母
1	男	オトト	オカカ	オジジ	オババ
2	男	オトト	オカカ	オジジ	オババ
3	女	オトト	オカカ		
4	女	オトト	オカカ		
5	男	オトト	オッカ		
6	男	オトト	オッカ	ジージ	
7	男	オトト	カーカ	ジージ	バーバ
8	男	オトト	カーカ		バーバ
9	女	トツツア	カーカ		
10	男	トツツア	カーカ		
11	男	トツツア	カーカ		
12	女	トツツア	ジャー		
13	女	トツツア	ジャー		
14	男	トツツア	ジャー		
15	女	トツツア	ジャー		
16	女	トツツア			
17	女		ジャー		
18	男	トート	カーカ	ジージ	バーバ
19	女	トート	カーカ	ジージ	バーバ
20	女	トート	カーカ	ジージ	バーバ
21	男	トート	カーカ	ジージ	
22	男	トート	カーカ	ジージ	
23	女	トート	カーカ	ジージ	
24	男	トート	カーカ	ジー	
25	女	トート	カーカ		
26	男	トート	カーカ		
27	男	トート	カーカ		
28	女	トート	カーカ		
29	女	トート	カーカ		
30	男	トー	カー	ジー	バー
31	女	トト	ンバ		

にはカーカも対応している。

大局としては、オトトにはオカカが、トートにはカーカが、ト一にはカ一が、そして、トトにはンバがそれぞれ対応していると言えよう。なお、トツツアの場合、そのいずれもが「祖父」「祖母」の存在しない家であることに注意したい。インフォーマントによれば、トツツアとジャーで把握される対象はいずれも比較的年齢が高い人物とのことである。

「祖父」に関しては、オジジ／ジージ／ジー、また「祖母」に関しては、オババ／バーバ／バーの3段階があるが、「父」「母」と比べると段階数が少ないことが指摘される。

ところで、「祖父」と「祖母」については、その対象が存在しない場合が目立っているが、それはもともと「祖父」「祖母」がいなかつことによる結果である。今回の被調査者については、自分の家は親の世代に分家によって生まれた、と答える人が多かった。その時期は1910年代、第一次世界大戦前後の頃と推測される。これはおそらくは徴兵を回避するための方策であったのだろう（戸主には徴用が免除されたからである）。

なお、以上の形式については、呼称と名称とで区別されず、また内と外との区別もされず、地域社会の全員によってその運用がなされていたのである。

4 1965年時点における実態

表3は、上平村立上平中学校に1965（昭和40）年度に在籍していた生徒（21名）を追跡して、彼らが、当時において、自分の「父」「母」「祖父」「祖母」をどのように呼び、言及していたかを調べた結果である。

上の1935年の時点とはその間に第二次世界大戦を挟んでいるが、ここに大きな変容を見て取ることができる。それは、家の等差に対応した形式のバラエティがまったく消失し、一つの形式に統合して、一律化されたことである。

インフォーマントによれば、この変革は、いわゆる戦後民主主義の思潮

表3. 1965年の親族呼称（13歳時）

	性	父	母	祖父	祖母
1	男	●	●	●	●
2	女		●		
3	男	●	●	●	●
4	男	●	●		
5	男		●		●
6	男	●	●	●	●
7	女	●	●		●
8	女	●	●	●	●
9	男	●	●	●	●
10	女	●	●		
11	男	●	●	●	●
12	女	●	●		●
13	男	●	●	●	●
14	女	●	●	●	●
15	女	●	●		
16	女		●	●	●
17	男	●	●	●	●
18	男		●	●	●
19	男	●	●		●
20	女	●	●	●	●
21	男	ト一	カ一	ジ一	バ一

● トーチャン、カーチャン、ジーチャン、バーチャン

のもとで意識的に行われたと言う。

表によってそのことを確認していただきたい。一人の被調査者を除いては全員が、「父」「母」「祖父」「祖母」を、それぞれトーチャン、カーチャン、ジーチャン、バーチャンと呼んでいる。古い表現のトー、カー、ジー、バーを使用する<21>は、表2での<30>と同じ家の人物である。

なお、これら形式についても、呼称と名称との区別はなされず、対象が家族だけではなく、地域社会の全員によってこのように呼ばれ、言及されていたのである。

ところで、新表現の～チャーンの構成をもつ形式の出自であるが、これは当該山間部に経済的、文化的な影響をたえず与えている砺波平野部の方言からの直接的な借用によったものと考えられる（真田 1991）。

5 1995年時点における実態

表4は、上平中学校に1995（平成7）年度に在籍していた生徒（30名）を対象にして、彼らが自分の「父」「母」「祖父」「祖母」を、地域社会でどのように呼び、言及しているかを集合調査法で調べた結果である。

調査では次のように質問した。

それぞれの対象（「父」「母」「祖父」「祖母」）について、

- ① 家で「～」にむかって直接呼びかける時、「～」を何と呼ぶか。
- ② 友達に「～」のことを言う時、「～」を何と言うか（うちの～が）。
- ③ 先生に「～」のことを言う時、「～」を何と言うか（うちの～が）。

表では結果を男女別に配列して、呼称（①）と名称（②）をそれぞれに掲げてある。現代になって呼称と名称が分離してきたからである。

指摘される点は、かつての新表現トーチャン、カーチャン、ジーチャン、バーチャンが衰退し、その上に、オトーサン、オカーサン、オジーチャン、オバーチャンがかぶさってきてているということである。これはまさに標準

表4. 1995年の親族呼称（13、14、15歳時）

	性	父 / 名称	母 / 名称	祖父 / 名称	祖母 / 名称
1	男	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
2	男	オトーサン/●	オカーサン/●		
3	男		オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
4	男	オトーサン/●	オカーサン/●	● / ●	● / ●
5	男	オトーサン/オトーサン	オカーン / オカーサン	● / ●	● / ●
6	男	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	オバーチャン/●
7	男	オトーサン/●	オカーサン/●	オジーチャン/●	オバーチャン/●
8	男	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	● / バーバー
9	男	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	● / ジーサン	● / パーサン
10	男	トーサン/●	カーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
11	男	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
12	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
13	女		オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	オバーチャン/●
14	女	オトー / オトー	● / オカーサン		バー / バー
15	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
16	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
17	女	オトーサン/●	オカーサン/●	オジーチャン/●	オバーチャン/●
18	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
19	女	オトーサン/●	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
20	女	トーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / オジーチャン	● / オバーチャン
21	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
22	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	オバーチャン/オバーチャン
23	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
24	女	オトーサン/オトーサン	オカータン/オカーサン	● / ●	バータン / ●
25	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
26	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
27	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●
28	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/●	オバーチャン/●
29	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	オジーチャン/オジーチャン	
30	女	オトーサン/オトーサン	オカーサン/オカーサン	● / ●	● / ●

● トーチャン、カーチャン、ジーチャン、バーチャン

語体系への流れである。

ただし、この交替は、「父」「母」と比べ、「祖父」「祖母」においては比較的遅延しているようである。その原因の一つは、おそらく標準形式が旧形式のバーチャン、ジーチャンと同じく～チャンの構成を持っていることによっていよう。

「父」と「母」に関しては、すでにオトーサン、オカーサンが圧倒的になっている。「父」については、呼称でトーサンが2名、オトーが1名いる。

「母」については、呼称で、オカータンが1名、カーサンが2名、そして、オカンが1名いる。呼称においては、その運用はすでに個人を中心としたものに変化しているようである。

興味深いのは、名称においてのみ旧形式のトーチャン、カーチャンを使う者が何人か存在することである。ただし、ここで名称とするものは、「友達に、うちの～が」という文脈における表現なので（家の中での場合などを推測すると）必ずしもそのすべてではないと思われるが、言及（refer）において地域社会の旧形式が残存するという実態に注目したいのである。

なお、③の「先生」に対する場面においては、全員が、オトーサン、オカーサンで、チチ、ハハと回答した生徒は皆無であった。当地のこの世代ではまだ内と外との弁別が習得されてはいないという点を付け加えておきたい。

参考文献

- 真田信治（1978）「北陸の親族語彙」『日本方言の語彙』三省堂
渡辺友左・真田信治・杉戸清樹（1986）「越中五箇山山村の社会変化と敬語行動の標準」『社会変化と敬語行動の標準』秀英出版
真田信治（1991）「社会言語学から見た言語変化」『日本語学』10-4